

コミュニケーションとしての実務翻訳

—関連性理論の観点から活動、評価を考える—

東 伴子

グルノーブル大学 LIDILEM

要旨

本稿では、フランスの大学の専門翻訳コースにおける『L1 (フランス語) から L3 (日本語) への翻訳の授業』の学習目標を再考し、認知・機能的アプローチに基づいた活動・評価の試みを紹介する。授業では、翻訳を2つの言語文化間の仲介的コミュニケーション活動と捉え、「最適な関連性」を持つ翻訳を目指して、社会的ディスコースとしてのさまざまなジャンルのテキストの翻訳を行った。

【キーワード】 仲介活動とコミュニケーション、最適な関連性、専門翻訳、ジャンル

1 はじめに

近年グローバル化とインターネットの発達に伴い、多様な領域における実務翻訳の需要が伸びている。企業や観光地のウェブサイトを始め、美術館のカタログや音声ガイド、国際会議や見本市の資料、動画の字幕など、生活を取り巻く様々なテキストの多言語表示が進んでいる。本稿では、このようなテキストの日本語への翻訳場面を想定し「実現性のあるタスク」に基づいた「専門翻訳」の授業の実践と考察を報告する。翻訳コースの概要と問題の所在を提示したあと、目的、活動内容、評価基準について述べていく。

2 翻訳コースの概要と学習目標

2.1 グルノーブル大学の翻訳コース概要

グルノーブル・スタンダール大学に設置されている「多言語専門翻訳修士課程」は L1 (フランス語) と L2 (英語) 間の翻訳に併せて、L1 と L3 間の翻訳技能を養成するコースである。現在、L3 として、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、日本語のコースが開講されている。日本語専攻の学生数は平均各学年4~6人で、日本語のレベルはCEFR B2 習得中が主である。この修士課程への入学には日本への10ヶ月以上の留学・滞在経験、JLPT N2 合格を原則として課している。英語の能力はCEFR C1 が要求される。日本語専門翻訳に関する授業には日本語からフランス語への翻訳、通訳、フランス語から日本語への翻訳の3つがあるが、本稿で扱うのはフランス語から日本語への授業(年間30時間)である。

2.2 日本語への翻訳の授業の学習目標

翻訳を将来の仕事として考える場合、この課程に在籍するフランス語母語話者にとっては英仏間翻訳、また日本語からフランス語への翻訳が中心となり、母語から日本語への翻訳の授業の位置づけは曖昧である¹。実際、母語から日本語への翻訳の授業は「日本語文法

や表現の誤用・不適切さの添削」に主眼が置かれがちである。確かに B2 習得中の学習者にとって言語熟達度の向上は主要な学習目標であるが、本授業では、あくまで翻訳遂行のコンテキストにおける言語学習という位置づけをした。従って授業の学習目標は (1) 中介活動としての翻訳技能の養成、(2) 翻訳に必要な言語能力・運用能力の向上、(3) 一連の翻訳活動に必要なストラテジーの活性化の 3 点に設定している。この 3 点に留意しつつ、実践例に基づいて、何を訳すか、どう訳すか、どう評価・指導するか考えていく。

3 何を訳すか

3.1 社会的ディスコースとしてのテキスト

この授業ではさまざまな機能、目的、読者を持つオーセンティックなテキストを教材として使っている。これらのテキストをディスコースジャンル、つまり「社会的・歴史的ないくつかの条件がそろって初めてコミュニケーションの道具として機能するもの」(Maingueneau 2007: 38 筆者訳) と考える。同じジャンル内のテキスト同士は多かれ少なかれ類似性・共通性を提示しており、それは語彙、文体、テキスト構成、慣用的表現など様々なレベルに関連している。従って、翻訳を行う前にまずテキストのジャンルを見定め、到達言語の社会における同じジャンルのテキストの特徴をチェックする必要がある。

3.2 授業で使用したテキストとアプローチ

以上のようにテキストを社会的ディスコースと捉えると、与えられたテキストをそのまま文頭から訳していくのではなく、テキストが社会的にどのような位置づけがされているのか、翻訳の目的は何かまず考える必要がある。これは翻訳遂行の準備段階のストラテジーにあたる。専門言語²の分野では間テキスト性 (intertextuality) の度合いによるテキストの様々な類型化が試みられており (Scarpa 2010)、翻訳者にとっての指針ともなる。例えば同じ専門的テキストの中でも翻訳者にとって創造性の高いもの (広告) から中間のもの (一般向けの専門的記事など) を経て創造性の低いもの (規則、使用説明書) が連続的に分布するというような見方ができる。この授業ではその学習目的から、比較的創造性の高いジャンルのテキストの翻訳が中心であったが、その他のジャンルも扱った (表 1 参照)。新製品販売のキャッチフレーズの部分は創造性が高く、一方、施設使用規則、アプリケーションの翻訳などは慣例的なフォーマットに沿った創造性の低い翻訳が期待される。

ジャンル	使用テキスト例	翻訳の目的 (ミッションの形で与える)	主な機能	関連分野
新製品販売のカタログ	折りたたみ式キックボード	日本への販売のためサイトに日本語を入れる	説明、説得	スポーツ用品、ネット販売
観光地のパンフレット	各地の城や文化財 (ヴァンセンヌ城)	日本人観光客のために日本語版作成	説明	観光、フランス史、建築
コンテスト作品募集	フランス国内映画祭の募集要項	日本人監督からの依頼で日本語に訳す	説明、指示	コンテスト、映画祭

インタビュー (ビデオ)	日産・ルノー社長の 提携による経営戦略	経営者セミナーのため に字幕を入れる	説明、 論証	経営、提携、自 動車業界
施設使用者向 け規則	スパ施設利用規則、 ホテル宿泊約款	日本人顧客用に翻訳	説明、 指示	ホテル業、施設
アプリケーシ ョン	iPhone 用放射線探知 アプリケーション	日本販売に向けて日本 語版の作成を依頼され た	説明、 指示	放射線探知機、 プログラミング 言語

表1 使用テキスト一例

4 どう訳すか 最適の関連性

4.1 関連性理論から

翻訳活動は言語Aのテキストから言語Bのテキストへの変換作業であると捉えられることが多い。しかし仲介活動として翻訳を考えると、言語Aでテキストを書いた人の意図が言語Bを読む人に正しく伝わるためのコミュニケーションを想定する必要がある。この観点からよい翻訳とは何かを考えたとき、関連性理論の提唱する「最適な関連性」という概念の援用が浮かび上がった。以下簡単に趣旨を述べる。スペルベルとウィルソンによって提唱された関連性理論は、人間のコミュニケーションはコードだけでなく推意によるもので、人は常に「関連性」を求めているという前提がある。そして聞き手が話し手の発話を正しく解釈するのは「最適な関連性」(最小の処理コストで最大の認知効果³)が得られたときに実現されるとしている。関連性理論では、発話の記述的用法のほか、解釈的用法(第三者の発話を引用したり直接的、間接的に伝える用法)を設定しているが、翻訳行為も、別の言語での伝達ではあるが、発話の解釈的用法に当たると考えられる(Gutt 2000/2010)。この考えを援用して翻訳の留意点を次のようにまとめることができる。

- (1) 元のテキストのコミュニケーションの意図、つまりディスコースジャンルを読み手が理解し共有できるようなスタイルで訳す。つまり同じ効果を読み手に与えるように訳す。それにより、読み手は予測によりより少ない労力で話し手の意図が正しく解釈できる。
- (2) テキストの書き手は、その言語Aのコンテキストにおいて関連性が最適になるように書いているが、言語Bに直した場合それがそのコンテキストで同じように最適であるとは限らない。よって翻訳者は言語Bに直しながら、同じ効果を持つように新しいコンテキストに合わせて調整する必要がある。

4.2 実践例 授業の流れ

実際の授業を次のような流れで行った。まず、学生に「ミッション」の形で翻訳のタスクを与える。実際の翻訳場面に近い設定で誰からの依頼か何のために翻訳をするのかを明示した。学生はテキストジャンルを特化し、専門用語を見抜き、専門性の高さ、難易度などを予想する。その後、必要に応じて同ジャンルの日本語のテキストや参照できる専門分野のリソースを検索する。これらの準備を経て指定部分の翻訳(宿題)を行い、教師に提出する。次の授業で提出された翻訳の中から、教師が「考察・指導が必要な部分」を選び、全員の訳をクラスで見て「仲介」という観点からコメントをしあう。工夫した点、参照したリソースなどのストラテジーを共有する。翻訳上に発生した仲介行為、言語表現の難点

に注目し、仲介活動と言語活動の接点となる部分の問題点を取り出し、日本語の社会言語的背景、文法、語彙形成などを見直す。教師が各自に添削して返し、翻訳例を渡す。

5 どう評価・指導するか

5.1 評価基準表

学習者に翻訳授業の目標・留意点を示し学生と教師が客観性のある評価を共有するために、前述の学習目標に基づき、学習者との話し合いを通じて評価基準表を作成した。1 から3は翻訳・仲介スキルに関するもので、4と5は言語能力・運用能力に関わっている。実際には仲介行為は言語を通して行うため、この2つの側面をはっきり区別するのは難しいが、1から3のチェックのあとで4と5を見るように試みた。

翻訳に求められる能力	具体的な目標、留意点	最適な関連性のために
1.ジャンル、目的にあった翻訳ができる	ジャンルにあったスタイルで書ける 目的に応じて、訳し方を変えることができる 専門用語を見極め、使える。 *検索、チェックを怠らない	予測性を高め処理コストを減少、忠実性を調整
2.翻訳完成度：情報量、質、焦点、流れ	必要な内容をすべて伝える 新情報・旧情報、焦点、流れを考慮して訳す *もとのテキストの意図を正確に解釈する	元のテキストと同じ文脈効果を狙う、処理コストを減少
3.仲介能力	読み手の文化的背景を配慮して工夫する 必要に応じて解説、言い換えできる	文脈効果を高める
4.テキスト完成度：構文、語彙、表現 適切さ	適切な語彙（使用語彙領域）、構文、慣用表現、コロケーションを使うように意識する *『コンテキスト発信型』語彙、表現学習 *ネットなどを利用し使用の適切さを確認できる	処理コスト減少
5.言語運用能力：正確さ、知識量	既習文法事項を駆使して表現できる 基本的な文法は正確に使える 複雑な内容も言語化できることを目指す *モニタリングの習慣をつける	処理コスト減少

表2 評価基準表

5.2 指導例 学習者の訳から

実際の活動の一例を以下に示す。繊維科学の分野がいかにスポーツウェアの性能向上に役立っているかを説明する一般向けの記事の一部を訳す活動である。学習者は「日本のスポーツウェア会社がこの記事に関心を持ち、日本語訳を依頼してきました」というミッションを受け、それが **Mediachimie** という化学関係のポータルサイトに掲載されている記事であることを確認する。この段階でジャンルと専門分野の特化、読者、専門度の想定を行う。タイトルの部分の学習者の翻訳文の一例を示そう。

フランス語タイトル

« Des textiles pour sportifs Apport de la chimie pour améliorer confort et performances »

学習者の翻訳例

例1: スポーツマン用の織物 化学のおかげで快適さとパフォーマンスを改善させる

例2: スポーツをしている人のためのテキスタイル。快適さと性能を改善するために科学の利用。

例3: アスリートのための繊維 化学による着やすさと性能

例4: スポーツのための織物 快適性とパフォーマンスを向上させるための化学の寄与

「タイトル」というテキスト構成部分に期待されているのは、明快さ、簡潔さである。どの訳も言語的適切さ・正確さという点では直しが必要であるが、それぞれのよい点、悪い点を話し合った。例えば例3は「向上」という概念が訳されていない。しかしそれを加え「化学による」を「化学がもたらす」にするとかなり簡潔に意図が伝わる。このように模範解答を与えるのではなく、各翻訳に対して改善案を見つけるのが基本的アプローチである。適切な語彙選択は、仲介活動上の重要な活動であるが、ここでは « sportif » (スポーツマン)、textile (繊維、織物) をこの文脈でどのように訳すと読者が労力をかけずに (違和感を感じずに誤解せずに) 読めるかなどをクラスで話し合った。

次の例は 読み手が楽に解釈するためには「適切な表現を考えて言い換える必要」があるという例、そして、翻訳活動を通して文法事項の復習をする必要が出てきた例である。

翻訳するフランス語の文

Une combinaison unique pour la natation, le cyclisme et la course à pied (Figure 13) doit avoir un effet « seconde peau » et permettre un séchage rapide.

学習者の翻訳例

例1: 水泳、自転車、ランニングのためのユニークなボディースーツは 肌に触れている感覚がなくて早く乾く機能が必要です。

例2: 水泳、サイクリング、ランニング (第13図) を組み合わせたたった1つなスーツは、「第二の皮膚」で、迅速なを可能するべきです。

例3: 水泳とサイクリングとランニングのスーツ(第13番図)は、「第二の皮膚」の効果で早く乾かすことは必要です。

例4: スイム、バイク、ラン (図13) のための一着だけのスーツは、皮膚のように体にくっついて速乾性を持つべきです。

これはトライアスロン用のウェットスーツに関する記述である。「Une combinaison unique pour la natation, le cyclisme et la course à pied」は、「一着で水泳、自転車、長距離走の3種目に使われるウェットスーツ」という意味で、例2、例4ではそれを日本語で表現し直そうと工夫をしている様子が伺える。ここでは **unique** をそのままユニークと訳してよいか疑問をもち、用例を調べるなどのモニタリング能力が要求される。例1はそれができていない。日本語のコンテキストでどのように表現し直すかを考えるのが、仲介能力と言語表現能力の接点の活動であろう。また「seconde peau (第二の肌)」をそのまま訳したほうがいいのか、説明したほうがよいかの議論も読み手への効果を考える活動の素材となる。最後にここで取り扱うのは、義務、必要性を表すモダリティの復習である。既習事項であるはずの

「べきだ」の使用上の意味を翻訳のコンテキストで確認し、この場では不適當であるということを実感させた。このようなコンテキスト発信型の語彙、文法指導は、必要に応じて行った。例えば商品説明に多く現れる「～性」「～よけ、～防止」などの接尾語的表現、「入れ替え」、「ずり上がり」などの複合動詞の表現が、翻訳のときに「簡潔に文脈に合った表現がしやすく最適の関連性を保証しやすい」ため非常に有益であることを強調した。また、紙面の関係で例は省くが、焦点、流れを明確にするために、必要に応じては談話マーカ、接続表現などを加える工夫も必要だということも実践を通して気づかせた。

6 まとめと今後の課題

まとめに代えて、このようなアプローチを通して観察された学習者の意識の変化を挙げることにする。まず、「翻訳は語彙の置き換え、正しい文の構築」から「一番言いたいことは何か、それが伝えられるか」を意識するようになった。「私は日本人のような文が書けない」と言っていた学生は、「自分はフランス語はよくわかるのだからそれを正しく理解して、日本人にわかりやすく伝えられればとりあえずよい」、「いろいろな訳し方がある」というコメントを残した。また、「修士課程では翻訳の授業ばかりで日本語が上達しない」と言っていた学習者は、「翻訳をしながら実際に使われている文法や語彙を勉強できた」など授業の位置づけに変化が見られた。ストラテジーの活性化、翻訳に関する意識の変換という点では比較的効果があったと考える。今後の課題としては、「最適な関連性」を念頭に置いた、コミュニケーター・仲介者に必要な判断力、バランス力を養っていき、仲介能力と言語能力の接点で「言語能力、社会言語能力、文化・異文化能力」を養成するカリキュラムとより精密な評価表を構築したいと考えている。

注.

¹ 翻訳者連盟の倫理規定では正式な仕事は外国語から母語への翻訳のみと規定されている。また母語以外の言語では表現力の適切さに「自信のなさ、不確定さ」が残る。しかし近年は公私様々な場で、フランス語母語話者にも日本語への翻訳の機会が増えている。原文の解釈に関しては、母語話者の方がニュアンスや書き手の意図の解釈に信頼性が高いことが多く、最終的にネイティブチェックを受けることによって表現に関する問題が解決できることから、L1 から L2, L2 への翻訳活動も推奨すべきであると考えている。

² フランス語 « langue de spécialité », 英語 « LSP (language for specific purposes) » の意である。

³ 「処理コスト」は聞き手（読み手）が解釈にかける「労力」で、認知効果は、いかに意味のある新情報を得たかという認知状態の変化を指している。

<参考文献>

- Gutt, E. (2000, 2010) *Translation and Relevance – Cognition and Context*, St Jerome Publishing.
 Hickey, L. (Ed.) (1998) *The pragmatics of Translation*, Multilingual Matters Ltd.
 Maingueneau, D. (2007) *Analyser les textes de communication*, Armand Colin.
 Scarpa, F. (2010) *La traduction spécialisée – une approche professionnelle à l'enseignement de la traduction*, Les presses de l'Université d'Ottawa, Ottawa.
 Sperber, D. and Wilson, D. (1989) *La pertinence – Communication et cognition* (Relevance Communication and cognition 1986).